

西宮のマンション実態浮き彫り

広い分譲に独居高齢者

関学大生ら調査、出版

西宮市内のマンションの実態調査に関西学院大社会学部の学生らが行った。同学部の大谷信介教授(都市社会学)が編集した「マンションの社会学」が10日、出版される。住宅地図を活用した珍しい社会調査で、広い分譲マンションに独り暮らしの高齢者が住んでいるなど、行政が把握しきれなかったマンション居住者の姿が明らかになった。



「マンションの社会学」を編集した関西学院大社会学部の大谷信介教授

大谷教授は、西宮市の共同住宅に住居する世帯が全体の約62% (平成17年)と全国平均(約39%)よりも高いことに着目。20年に調査を始め、4年間で81人の学生がかかわって完成させた。住宅地図を丹念にデータベース化する手法で調査した結果、市内のマンション

は7178棟と判明。3、5階建てが63・8%と最も多かった。また、社宅が6年から19年までの13年間に半減し、とくに金融関係の社宅は135棟から27棟と激減したことも分かった。学生らはさらに、市内のマンション居住者約4千世帯に調査票を配り、約850世帯から回答を得た。この結果、新築分譲マンションでは4千万円以上が34%を占め、社宅やURなどを除いた民間賃貸マンションの平均家賃は9・8万円。間取りは3LDK以上が66・5%と、居住者は比較的裕福で、専有面積は広いなどの実態が明らかになった。

一方で、単身世帯の69・2%、夫婦世帯の74%が60歳以上の結果も。大谷教授は「定住意志が強いため、子育てを終えた夫婦が同じ広いマンションで住み続け、どちらかが亡くなれば単身者となる。行政がこうした実態を把握し、政策に生かしてほしい」と訴えている。

A5判、274頁。税込み3150円。問い合わせはミネルヴァ書房(☎075・581・0296)。